2010 年 9 月 4 日

# インターンシップ報告書（6）

総合国際学研究科　博士前期課程
国際協力専攻　国際協力専修 2 年
太田　徹

＜受入機関＞　UNFPA（国連人口基金）Headquarters in New York,
Change Management and Business Continuity Office,
Office of the Executive Director

＜期　　間＞　2010 年 3 月 22 日　－　2010 年 9 月 3 日

＜最近の業務内容＞

Reorganization によってニューヨーク本部から移転された 5 つの地域事務所（アジア/太平洋、アフリカ、中南米/カリブ、アラブ、東欧/中央アジア）による 2007 年から 2010 年までの Office Management Plans における特定の変遷パターンについて作成してきた文書の修正を行った。

文書の活用方法について、関係業務に携わるスタッフとスーパーバイザーを交えて会議を行ったところ、2012 年に Reorganization の内部・外部評価が実施されるため、Reorganization の前後（2007 年と 2008 年―2010 年）における Office Management Plans の変遷パターンに注目して文書を修正することになった。なお Reorganization が最終的に完了するのは東欧/中央アジア地域事務所がニューヨークからイスタンブールに移転される 2010 年末であり、2011 年の Office Management Plans には新たな変化が見られる可能性がある。（この業務には Reorganization の評価が実施される 2012 年まで継続して携わるのが望ましい。インターンシップ終了により継続できないが、2012 年に Reorganization がどのように評価されるかに注目したい。）

＜インターンシップ期間全体を通しての主な業務内容＞

1) UNFPA が Executive Board で使用する Reorganization についてのモニタリング・レポートを作成するため必要となる収集データの分析、および構築指標の分析。
2) フィールドオフィスを統括する地域事務所が作成した Office Management Plans の 2007 年から 2010 年までの変遷の分析。
3) UNFPA の Executive Director が東欧/中央アジア地域事務所の移転先決定の過程について各国代表部に説明するためのインフォーマル会議で使用する資料の作成補助。
4) 地域事務所移転についての組織内会議で使用する資料の作成補助。
5) データベース（電子ファイルおよび紙媒体）の整理。

＜目標とする成果―インターンシップ終了時における状況＞

1) コミュニケーション能力など国際公務員に求められるコンピテンシーの向上

英語の運用能力はインターンシップ開始前と比較して大きく向上したと感じられる。業務では英語で読み書きする機会に恵まれ、組織内では日常的に英語でコミュニケーションできる機会に恵まれた。コミュニケーションの姿勢については積極性に優れる同僚を手本にして多くを学ぶことができた。また、業務その他において自分の明確な意見を求められる環境に身を置いたことも大きな手助けとなった。国連機関の採用面接での「コンピテンシー・ベースド」という基準に最初は戸惑ったが、落ち着いて理路整然と自分の考えと経験を述べるという基本的能力が重要であることが分かり、特別に困難なことを求められるのではないと感じるようになった。

◆課題◆

約 6 か月の滞在で確かに英語の運用能力は向上したが、英語を第一言語とする職員と対等に議論できる水準ではない。帰国後に英語の運用能力をさらに向上させる意識的な努力が必要である。

2) 国際機関における文化と慣習の体得
職員の多様性、寛容さ、勤勉さ、要領の良さ、など国際機関の良い部分を多く見ることができた。特に国際機関における人材の特徴、運営の仕組み、業務の分野についても理解を深めることができた。また会議や勉強会に出席する機会が豊富に得られたことで、国際機関が敷居の高い存在ではなくなったと感じる。

◆課題◆
自分はニューヨークの本部事務所でのインターンシップであった。上司や同僚から情報を得たところでは、フィールドオフィスでは労働時間、職員の多様性、業務の性質、など多くの点で本部事務所とは異なるということである。贅沢な望みではあるが、本部事務所とフィールド事務所の両方でインターンシップを経験することは有益であると思われる。

3) 国連/政府組織で勤務する職員との人的ネットワークの構築
ニューヨークには多くの日本人が国連機関や政府機関に勤務している。国際的な仕事に就くことを目指してニューヨークに留学している学生も多い。このような環境で、国籍を問わず、様々な立場の多くの方々に会うことができた。今回得られたネットワークは、自分の進路選択に大きな影響を与えるだけでなく、今後どのような仕事に従事するにせよ、日常生活での行動や考え方に多様な刺激を与えると確信できるものである。

◆課題◆
日本人であるかどうかを問わず、ニューヨークでのインターンシップを通して出会うことができた方々と会える条件が整うことは少ないと考えられる。今後も近況を報告したり、意見を交換したりするなど、意図的に積極的なコミュニケーションに努めたい。

4) モニタリングと評価を中心とした国際開発分野での実務修得
組織再編成が開発プログラムに与える影響をモニタリング評価するために必要な業務に携わった。具体的な業務内容は「フィールド事務所を統括する地域事務所の業務計画に見られる変化を文章と表にまとめる」というものであった。世界銀行と国際開発高等教育機構が発行している資料を教科書として用い、モニタリング評価の概念と手法について理解を深めることができた。

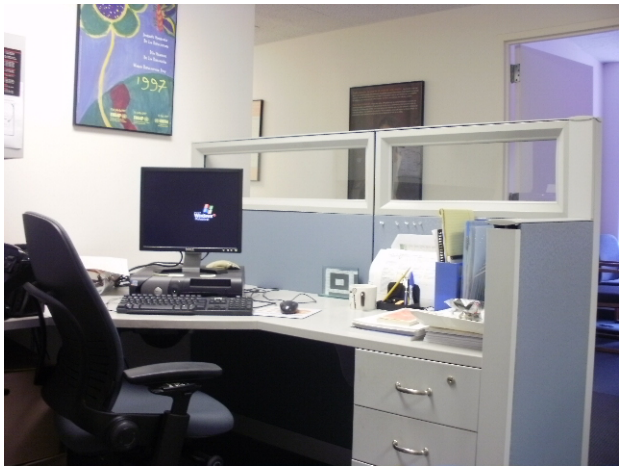
◆課題◆
モニタリング評価を応用できる分野の範囲は広いため、インターンシップを通して得た知識と経験は将来的に役立つことが期待されるが、自分の努力不足のため当初の目標レベルは達成できなかった。国際開発の仕事に就く場合は、自発的にさらなる習得を継続し、今回の業務経験がさらに有益なものとなるようにしたい。

≪最後に≫
　インターンシップを開始するまでは、国際機関への入口はせまく、その壁は高く思われた。しかし 6 か月のインターンシップを経て分かったことは 「(1)専門性、(2)コミュニケーションに必要な外国語能力」を修得すれば国際機関に就職することは可能であり、「(3)社会人としての常識、(4)仕事への真摯な姿勢、(5)心の余裕」を持ち合わせていれば、さらに勤務を継続していくことが可能であるということである。「(1)専門性、(2)コミュニケーションに必要な外国語能力」については、ある一定の年齢に達するまでに見に付けておかねばならない。なるべく早い時期から自分の専門性を意識して修得に努める必要がある。また近年、国際機関は企業や公共機関で適当な経験を積んだ人材を以前より積極的に採用する傾向にあるらしい。その意味では、国連競争試験や JPO の制度以外にも、条件を満たせば国際機関への入口はある程度は開かれている。
　今後の自分の進路選択については冷静に、客観的な視点を持って考えたい。国際機関への就職も考慮に入れるつもりである。しかし現状では専門性と外国語能力について不足する部分があると感じる。外国語能力を磨く努力をしながら、専門性を身に付けられるような業務や研究に従事することが現実的な選択である。
　UNFPA ニューヨーク本部でのインターンシップを通して様々な貴重な経験をすることができた。大学院のインターンシップ制度がますます充実するように自分の経験を還元することができれば幸いである。インターンシップの機会を提供してくれた UNFPA、大学院 GP プログラム、その他の関係の方々には本当に感謝している。今後も多くの学生が国際機関に派遣され、その中から将来国際公務員として就職する多くの事例ができることを期待する。　（以上）

オフィス入口

ワークステーション

オフィス入口付近のパネル




自分のデスク

民族衣装

デスクの名札

オフィス（18 階）からの風景

ID カード（最終日に返却）

世界中にある事務所の外観写真

UNFPA ニューヨーク本部が入っている The News Building のシンボル‘GLOBE’

東京事務所の外観

The News Building